秋の到来が近づき、凛とした夜の空気と紅葉の季節が目前となると、鉄坂では一週間にわたり「晩夏祭り」が開かれる。祭りの締めくくりとなる花火大会は、何百年と続く町の伝統である。その見事な景観に反し、家守キリコはこの季節が来ると少しだけもの哀しい気持ちになる。キリコの母は、島田一族の頭領、島田ソウジロウの息子たちに剣術を教え、キリコの父は二人の刀を鍛えた。そのため幼少期からキリコは頻繁に島田城を訪れており、この花火が打ち上げられる様子を城の廻縁からハンゾー、ゲンジとともに眺めていた。当時からハンゾーは己が背負うであろう未来を見据え物思いにふけりつつ、ゲンジはゲンジで数多いる侍者たちの目を盗んで仕入れたお菓子をこっそりキリコに渡すなどして過ごしていた。一度、ハンゾーがこう口にした。

「この町で一番の眺望だ」

それも今は昔。島田一族は去り、今では橋元組という新たな勢力が城を占拠している。

「毎年、これで終わりじゃなければいいのにって思うよ」

祭りからの帰路につく人混みの中で、キリコは同行していたリョウタ、ノブト、サクラの三

人にそうこぼした。

「今年はまだ終わらないかもな」

リョウタは意味ありげな笑顔で応えた。リョウタは「ごう山ラーメン」でアルバイトをしている。決して実入りのいい仕事ではないが、秘密の情報を盗み聞きするにはうってつけだった。そうして集めた情報を元に彼らが行っている活動は、多少法に触れるのかもしれないが、それも彼らは必要悪と考えていた。島田家が力を失った後、鉄坂を脅かしている犯罪組織に対抗するためなのだから。

島田家が去ったことで空白となった権力の座を、橋元組はさらっていった。

それから十年、橋元組の支配はいっそう強固になるばかりだ。

橋元組による密輸や、それ以上にいかがわしいビジネスが彼らの主な資金源だった。橋元組に楯突いた後に「不運」に見舞われ、病院送りとなる被害者も後を絶たない。観光客向けには、店じまいが早いのは町の伝統だからだと言われているが、本当の理由は、橋元組が台頭してから夜の治安の悪化に歯止めがかからないからだ。

リョウタやほかの仲間たちは、もともとはただの不良だった。だがキリコは、彼らの心の奥にある善、そして怒りを、よく理解していた。彼らは小さなギャングを組織し、スプレーでグラフィティを残して己の存在を示したり、橋元組本部の窓を破壊したり、さらには公然の秘密となっているが、橋元組が闇取引の拠点としているバー「tora no sumika」を襲撃したりするなどの活動を始めた。いつの日か、橋元組に決定的な打撃を与えるチャンスが来る。リョウタはそう仲間たちに話した。

キリコもそれを信じていた。そして、待ち望んだチャンスは想像以上に早く訪れた。

リョウタがノブトから得た情報によれば、二日後、橋元組が密輸した武器が近くの漁港に到着するという。サクラも貴重な情報を仕入れていた。漁港で荷物の積み下ろしの仕事をしている叔父を訪ねた際、サクラは顔をそむけるふりをしてメインゲートのセキュリティコードを入力するところを盗み見ていたのだ。貨物は一晩港の倉庫で保管され、明朝橋元組へと受け渡される。チャンスは一度きりだ。

その晩、キリコ、リョウタ、ノブト、サクラの四人は誰にも見つからずにゲートにたどり着いた。しかしキリコは警戒をゆるめない。コードを入力するとゲートはあっさりと開き、漆黒の新月の夜、開いたゲートの中から煌々とした照明の光が差した。

「目標の区画はどっち？」

キリコが尋ねる。

「6-7-5番だ」

とリョウタ。

「そこのコードもサクラが持ってる。でもまずは、この明かりをどうにかしないとな」

「カメラを始末したほうが早いよ」

キリコは二振りのクナイを取り出してくるくると回転させると、その切っ先で建物の上部に設置された監視カメラを指し示した。

一行は安堵の笑みを交わす。全員がキリコの実力に信頼を置いているのだ。

「いいね」

とリョウタ。

「頼んだぜ、キリコ。俺たちは目標区画に向かって、先に扉を開けておく」

一行は二手に分かれ、素早く、しかし物陰に隠れながら目的地へ向かった。キリコは目を閉じ、精神を集中させる。

「お狐様、私を導いて」

まるで柔らかい尾に撫でられるような温もりと親愛を感じ、心の中で像が浮かび上がった。キリコは目を開く。

お狐様が応えたのだ。

はかなく、柔らかな輝きを放つその体は月光のように美しく、近くの建物の上からお辞儀をしている姿は、まるで一緒に遊ぼうと誘っているかのようでもある。

キリコはにっこりと笑って、お辞儀を返した。キリコは壁に跳びつき、優雅に、素早く登る。気づくとすでに狐の精霊も壁伝いに駆けだしていた。キリコは後を追いながら、監視カメラの位置を確認する。クナイを取り出したキリコは、素早くかつ精確な手さばきでそれを投げた。一台のカメラがパチパチと音を立てて点滅し、真っ暗になる。狐はふわりと宙に舞い、キリコは狐が着地するであろう地点より二メートル先にテレポートした。

鬼ごっこ開始だ。ふたりは競うように建物の合間を駆け抜け、キリコは次々とクナイを投げては確実に、ひとつ残らず監視カメラを破壊していく。ところがある建物の角を曲がったところで、キリコは狐の気が一変するのを感じた。

狐はもはや遊び好きの精霊ではなく、この世のものにはないような、不可思議で、それでいてぞっとするほど現実感を持った存在に変わっていた。警戒中の橋元組のメンバーが三人、倉庫の番をしている。キリコは母から学んだ術を駆使し、一人をクナイの柄で、もう一人は肘打ちで片付けた。三人目は手に持つ武器を叩き落したが、男はキリコの攻撃に持ちこたえ、逆にキリコ

の腕を掴もうとした。キリコは驚いたが、これをかわし、男の腕を掴んで腹に肩を入れ、前方に投げ飛ばしてコンクリートの地面に叩きつけた。男は気を失った。

男たちを倉庫内のロッカーに押し込み、屋上にテレポートするキリコ。そこからあたりを見渡すと、目的の建物にたどり着こうという仲間たちと、彼らを追いかける橋元組のメンバーの姿が目に飛び込んできた。サクラたちは橋元組の存在に気づいていない。

キリコは急いで仲間の元へ駆け寄る。目標区画の扉を無事に開いたサクラは一歩後ろにさがった。そこへ追跡者の手が伸びるが、キリコは首と腹に強打をお見舞いして、すんでのところで敵を仕留めた。

「間一髪」

とノブト。

全員の注意が積荷に向けられた。狙いのケースは簡単に見分けることができた。橋元組の所有物であることを示す、虎の頭をかたどった家紋が刻印されていたからだ。しかし、ケースは重く、運ぶのは骨が折れた。それでも一行はなんとか運び出し、発案者であるリョウタが一つ目のケースを開ける大役に選ばれた。予想通り、中身は銃でいっぱいだ。その場にいた全員が、重苦しい表情で凶器の山を眺めた。

キリコはケースの一つを押し出して、海に沈めようとした。いかに橋元組といえども、暗い海に潜ってまで探しはしないだろう。

そこでリョウタがキリコの腕を掴んだ。

「待ってくれ。今年の花火はまだ終わりじゃないって言ったろ？」

そう言いながら彼はバックパックを開いた。

キリコはその中身に目を向ける。

「たしかに言ったね」

彼女は静かに応える。

「夏の間中、花火をかき集めてたんだ。奴らに一泡吹かせてやろうと思ってさ。時限式の起爆装置もあるから巻き込まれる心配はない。どんなに派手な花火が上がるか想像してみろよ。きっと奴らも思い知るぜ！」

「うん、そうだね」

とキリコ。

その声の冷たさに、リョウタの笑顔は消えた。

「どうした？」

「その前に聞いてほしい。島田ソウジロウから直接聞かされた物語を。私はそれを、ある晩夏祭りの夜に、ソウジロウの息子たち――ハンゾーとゲンジと一緒に聞いたんだ」

リョウタ、ノブト、サクラはキリコよりも若く、何百年にもわたって島田一族が鉄坂と育んできた関係についてはよく知らない。数百年前、かつて鉄坂の人々は島田家に仕える兵のために米や特産物である「島田桃」を納めていた。鉄坂の人々との絆こそが一族の力の源だと、島田家の人々は分かっていた。たしかに島田家も富を搾取してはいたが、彼らは橋元組の見落としている大切なことを理解していた。農民たちが米や桃を丹精込めて育てるように、その農民たちの世話をするのは町を治める島田家だということを。

サクラは顔をしかめた。

「今その話する必要ある……？」

「うん」

まだ若い彼らが、暗い道への第一歩を踏み出そうとしていることを、キリコはよく分かっていた。彼らを止めるには、今しかないことも。そして、別の道を示すことができるかもしれないことも。

「大昔の話、鉄坂では例年のように晩夏祭りが執り行われた。花火大会が始まると、町民たちは皆川辺に集まり、家を空けた。

この行事と町民たちの行動を知っていた島田の敵勢力は、ある年の夏、島田家を打倒し、鉄坂の町を灰にするために動き出した」

話の流れを察したかのようにリョウタは目を逸らした。

「よそへ注意を向けていた町民たちは、敵の手によって火が放たれたことに気づくことができなかった。火は町の家々や果樹園を焼いた。敵は稲荷神社をも破壊しようとした。極めつけに、彼らは花火を守る護衛たちを殺し、放たれた炎はその花火にも引火した。

その時打ち上げられた特大花火は誰も見たことのないほど美しく、そして恐ろしい花を咲かせた、と言われている。

煙と炎、色とりどりの火花が辺り一面を覆った」

「どうしてそんなことを？」

とサクラは尋ねた。

「島田家への見せしめのためだけに？」

キリコはうなずいた。

「自分たちに対抗できるのは島田家しかいないと敵は理解していたの。だから島田家からす

べてを奪おうとした。組織も、城も、鉄坂そのものも。これらの襲撃はすべて、島田家を弱体化し、士気をくじくためだけに行われた。そこに住む町人たちにとってはただのとばっちりだった」

仲間は全員、うなだれていた。

それでいい。彼らに正しい道を歩ませるためには、これから話すことを理解させる必要がある。

「敵勢力はこう考えた。鉄坂には価値ある財宝の類はない。最も重要なのはその農作物で、島田は真っ先に果樹園と田園の消火に向かうだろう。町人の命は二の次だ。彼らの代わりはいくらでもいる。農地付近で待ち伏せすれば、島田の勢力を一網打尽にできる――。

だけどそれが誤算だった。島田は敵勢力の描いた通りには物事を考えていなかった。実際には、島田はまず城の備蓄から食料や水瓶、医薬品などの大量の物資を持ち出し、医者をかき集め、町の人々の救助に当たった。しかもそれらの指揮は島田一族の次期頭領たちにより行われた。負傷者の処置が終わると、島田軍、そして町民たちは団結して農地の鎮火へと向かった。そこには敵勢力の兵が潜伏していたけれど、町民たちと一丸になった島田軍は数で圧倒的に敵をしのいだ。奇襲を退けた島田勢力はその後、迅速な鎮火に成功した、と伝わっている」

キリコは息子たちに静かに語り掛けるソウジロウの声をよく覚えている。

「これは島田家の矜持である。町民から貢物を受ける代わりに、島田家が鉄坂の人々を守る。人々が腹を空かせれば食事を与え、傷つけば癒す。町が燃えれば火を鎮める。互いに助け合うことができなければ、ただの寄生だ」

キリコはリョウタに視線を向ける。

「橋元組の思惑も同じだよ。過去にも島田家の敵勢力は祭りと花火を利用した。町の名物であり、人々が誇り、愛する物を利用することで、いかに町民が無力で、自らが強大なのかを誇示しようとした。今もそう。橋元組は私たちの家族を虐げ、商店を支配し、わがもの顔で通りを練り歩いている」

彼女はリョウタに向かい、優しく言い聞かせた。

「こんな爆発を起こしたら、被害を受けるのは橋元組だけじゃ済まない。広がった火は町に飛び、人々を傷つけるかもしれない、誰かが死ぬかもしれないんだよ」

リョウタは下唇を噛み、彼女の言葉を噛み締めた。

「島田家だって完璧じゃない。特に最後は褒められたものじゃなかった。でも、リョウタの言う通りそれを使ったとしたら、私たちがどう思われるか考えてみて」

そう言ってキリコはリョウタの抱えているバックパックを指さした。

リョウタはようやく顔を上げた。

「俺たちの力は伝わる……だけど、俺たちも橋元組と同族だと思われるだけだ」

キリコはうなずいた。

「これ以上、鉄坂の人たちに恐怖を与えてはだめだ。でも、だからって橋元組を震えあがらせる方法が無いわけじゃない。奴らが一番恐れるのは、闇から襲われること。正体不明で、説明のできない存在……」

「――まるで妖怪のように」

そうリョウタが締めくくった。

一行の雰囲気が和み、中には笑みを浮かべる者もいた。キリコは心の中で、お狐様もそれを承認したのを感じた。

「じゃあ今日のところは、とりあえず銃を海に沈めちゃわない？」

サクラが遠慮がちに提案した。リョウタは花火の詰まったバックパックに顔を向ける。

「こいつはどうしようか？」

キリコが微笑んだ。

「それで私たちの勝利を祝おう」